「令和」に漂う排斥の臭い

1.「令」という文字

天皇が変わった。新しい年号が「令和」と決められ、新天皇は「令和天皇」と呼ばれることになる。

「令和」の「令」は、「すがすがしい」「うるわしい」という意味だということを政府は強調している。そして、外国の記者が「命令」の「令」の意味もあると報じたことを外務省が必死に否定したというニュースもあった[1]。

文字の起こりを手元の漢和辞典『漢語林』で見ると、「令」の字の冠の部分は「集めるの意味とも、頭上にいただく冠の象形ともいう」、下の作りの部分は「人のひざまずく形にかたどる。人がひざまずいて神意をきくさまから、言いつけるの意味を表す」と解説してある。したがって、文字の意味は次の順番で記載してある。「①命ずる、いいつける。②みことのり、君主の命令。③のり、おきて、法令、布告書。④いましめ、おしえ、教訓。⑤おさ、長官。⑥よい、りっぱな、すぐれた。⑦他人の親族に対する敬称。⑧文体の名。皇后・太子・諸侯などの命令」となっている。はっきりした説明は見当たらないが、「美しい」とか「立派な」とかを表す⑥の意味が派生したのは、おそらく⑤のような位の高い人の姿が立派なことから来たのであろう。

辞書には「令名」「令兄」「令嬢」などの用例があるが、戦後身分制度がなくなってからは日常的にこれらの用例に接したことはない。つまり、現在の日本人の日常語には「令」を「美しい」という意味で使うことはほとんどない。したがって、「令」の第一義として「命令」を想い出すのは当然である。「なんでわざわざこんな文字を」という第一印象はごく常識的な反応ではないか。

2．曲水の宴に集う人々

『万葉集』から採ったというのが謳い文句である。収録された詞書の場面は、大宰府での曲水の宴だという。そして、大伴旅人を中心とする一族と新興の藤原氏との権力争いが熾烈な時期の宴でのことだという。曲水の宴の庭を、筆者は京都の城南宮の庭を覗いて雰囲気を感じたことがあるが、庶民が飢餓にあえいでいた時代に貴族が酒を酌み交わして風流を気取っていたということだけでも、あまりいい気はしなかった。前号の記事で、日

[1] 「令和の令、政府『命令を意図せず』　海外の報道を否定」『朝日新聞DIGITAL』2019年4月3日 https://www.asahi.com/articles/ASM43577PM43UTFK01C.html

向守が部下に書記の処刑を命じた『今昔物語集』の記事をご紹介したが[2]、そのような国司級の門閥高級官僚たちが、宴の出席者であったろうと想像すると、はたしてこの言葉が民主主義制度に生きる現在の国民にとって共感できるものであろうかとの疑問を感じざるを得ない。

3．「国書」という視野狭窄

従来の漢籍から文字を選ぶのを退けて、国書の『万葉集』から選んだという解説が盛んに行われている。万葉集が、漢字を「万葉仮名」という形で表記しているのを見ただけでも、中途半端な説だと思う。そのこだわりの狭量に呆れてしまう。

『銀の匙』に、日清戦争が始まった時に、9歳の小学生、中勘助が先生や同級生のヘイトスピーチを非難して一人孤立した話が書いてある[3]。

> 戦争が始まって以来仲間の話は朝から晩まで大和魂とちゃんちゃん坊主でもちきっている。それに先生までがいっしょになってまるで犬でもけしかけるようになんぞといえば大和魂とちゃんちゃん坊主をくりかえす。私はそれを心から苦々しく不愉快なことと思った。先生は予譲や比干[4]の話はおくびにも出さないでのべつ幕なしに元寇と朝鮮征伐の話ばかりする。(中略) 町を歩けば絵草子屋の店という店には千代紙やあね様づくしなどは影をかくして到るところ鉄砲玉のはじけた汚らしい絵ばかりかかっている。(中略)
> (級友たち) は次の時間に早速先生に言いつけて
> 「先生、□□さん (著者のこと) は日本が負けるっていいます」
> といった。先生はれいのしたり顔で
> 「日本人には大和魂がある」
> といっていつものとおり支那人のことをなんのかんのと口ぎたなく罵った。それを私は自分がいわれたように腹にすえかねて
> 「先生、日本人に大和魂があれば支那人には支那魂があるでしょう。日本に加藤清正や北条時宗がいれば支那にだって関羽や張飛がいるじゃありませんか。それに先生はいつかも謙信が信玄に塩を贈った話をして敵を憐れむのが武士道だなんて教えておきながらなんだってそんなに支那人の悪口ばかしいうんです」
> そんなことをいって平生のむしゃくしゃをひと思いにぶちまけてやったら先生はむずかしい顔をしたがややあって

---

[2] 「中間管理職のアイヒマン化」『筒井新聞』第 355 号 (1)
http://tsutsuinews.html.xdomain.jp/355/355-1.pdf

[3] 『銀の匙』新潮文庫、2016 年、pp.136-140

[4] ともに『史記』に出てくる人物。予譲は戦国時代晋の刺客。智伯に仕えて重んじられ、後、主の仇を討とうとして果たさなかった烈士。比干は殷の紂王のおじ。紂王の暴虐を諫めて殺された。－前掲書の注による。

「□□さんは大和魂がない」
といった。

夏目漱石も森鴎外も内村鑑三も、明治に活躍した人々はみな漢籍の教養豊かな文章を残している。つい 100 年前まで、四書五経や朱子学は日本人の基本的な教養・道徳であった。漢籍から『万葉集』を区別して「国書」と認識しようという思考そのものが文化の何たるかを知らない人達の妄言である。

より広く目を開けば、人間の意識や文化が国によって違うという認識自体が間違っている。ユングは『心理学と錬金術』で、中国・インド・アラビア・ヨーロッパの文物に共通して曼荼羅で表現される集団的な意識下の観念があり、それは人類共通の文化や倫理の基盤であると言っている[5]。「令和」という言葉が「美」と「平和」を意味すると強調しているくせに、国境や国籍によって文化や精神が違っているように広言している政治家たちは、明治の 9 歳にも劣るのではないだろうか。

（2019 年 5 月 3 日　　哲）

[5] C・G・ユング、池田紘一・鎌田道生訳『心理学と錬金術』Ⅰ・Ⅱ、人文書院、1976 年